「こんなとこ寒くていられんなあ。」と僕も思った。
池のそばの茶店に入り、風をさけて、
コーヒー飲み、休む。
「なんか、買うか？」と健ちゃん、
僕に言ってくれたので、クラッカー買ってもらった。
そうそうに引き上げようと、八瀬方向の道を下る。
下水の工事している所があり、砂ぼこりでほこりが一杯。
修学院の方へ歩いて行く。
健ちゃんの背中で、風を避けながら、
高田はんは、僕の横で、半泣きだ。
それをよそに、僕は、
「人のデイトの中に入り、
一緒に遊ぶなんて、生まれて初めてだ。
大変、おもしろい。
僕も一度でいいから、あの八幡の子と
こんなデートしたいなあ。」
と思いながら歩いていた。
「さあ、どこへ行く？スケートでも行くか。」
と健ちゃんが、その時クラッカーを歩きながら、
ムシャクシャ食べている僕に、聞く。
「ふん、一年ぶりや。」と、
僕はまたひとつかみ口に入れる。

84 女って、鋭いなあ・・・・・・・・・・・・・・ 370

萩原良昭